



2011年3月11日に発生した大津波は、三陸沿岸で多くの住宅、学校、商工業施設などとともに、自然史標本を有する博物館施設を破壊した。山田町立鯨と海の科学館（以下、鯨館。岩手県下閉伊郡山田町船越7-50-1）もその一つで、被災直前に東邦大学理学部（船橋市）から移管された海藻の押し葉標本8万枚と液浸標本2千点余りが海水と泥砂の直撃を受けて押し流された。山田町の人々や寄贈主の吉崎誠博士（2011年逝去）とその一門により、早い段階から標本の救出（レスキュー）作業が始められたが、量が膨大なため、山田町教育委員会が岩手県立博物館（盛岡市）へ修復作業と仮保管についての救援要請を行い、同館鈴木まほろ氏から協力依頼を受けた筆者北山も山田町へレスキューに入るに至った（北山2011a, 2011b）。その結果、公民館に收容されていたおよそ1万点の押し葉標本が岩手県立博物館に運ばれ、現在も仮保管されている。標本を收容するための標本箱は、2012年に石川依久子博士（2015年逝去）ら藻類絵はがきの会が呼びかけた募金を一部として購入された（北山2013）。一方、北山が山田町職員の協力を得て新たに瓦礫のなかから回収した650枚の押し葉標本は、国立科学博物館（科博）植物研究部棟（つくば市）へ運ばれ、洗浄作業が施されたのち仮保管された（北山2017）。それらの標本は、鯨館が復旧し、標本の收容が可能な環境が整った暁に返還することになっていたが、2017年7月15日に同館が展示をリニューアルして再開館（図1）しても受入が困難な状況は変わらなかった。

東日本大震災の発生から8年。鯨館が少量ながらようやく標本の受入ができるようになり、折しも岩手県が今年6月1日～8月7日に開催する「三陸防災復興プロジェクト2019」の一環として、6月15日に特別講演会「3.11で再認識された標本レスキューの意義」（講師：北山）が企画されたので、この好機



図2 被災海藻押し葉標本帰館式（山田町立鯨と海の科学館特別展示室）。標本が筆者（左）から佐々木茂人山田町教育委員会教育長（右）へ手渡された（撮影：小田嶋祐希氏）。

### 3.11 被災海藻標本の帰還 —山田町立鯨と海の科学館の場合—

北山太樹<sup>1</sup>・川向聖子<sup>2</sup>



図1 再開館した山田町立鯨と海の科学館（2017年7月に撮影）。

を逃さず、被災標本の一部として科博の650点を鯨館へ返還することにした。会場には被災標本とともに、震災当時の風景や標本レスキューの様子がパネルで展示され、講演後に科博から鯨館へ標本を手渡す「帰館式」が行われた（図2）。そこで見本の1枚に選ばれたのは吉崎先生が山田湾で採集した紅藻ワツナギソウで、まさに山田とつくばを標本レスキューでつないだ輪が8年を経て完成した瞬間であった。盛岡の1万点も山田へ帰郷する日が近く到来することが期待される。

#### 引用文献

- 北山太樹 2011a. 東日本大震災による岩手県での海藻標本被災状況. 藻類 59: 101-103.  
北山太樹 2011b. 津波に襲われた海藻標本の救出—山田町立鯨と海の科学館での事例. 海洋と生物 33: 435-441.  
北山太樹 2013. 海藻標本の準文化財化と吉崎コレクション. 藻類 61:13-14.  
北山太樹 2017. 3.11で再認識された標本レスキューの意義—山田町鯨と海の科学館の事例から. milsil 10(6): 20-21.

(<sup>1</sup>国立科学博物館・<sup>2</sup>山田町教育委員会)

#### 【山田町立鯨と海の科学館】

所在地：028-1371 岩手県下閉伊郡山田町船越7-50-1。開館時間：午前9時～午後5時（入場は午後4時30分まで）。休館日：毎週火曜日（ただし、火曜日が祝日の場合は平常通り開館し、翌平日を休館日とする）、年末年始、資料整理日（12月1日～12月10日）。入館料：小中学生150円（120円）、高校生・学生200円（160円）、一般大人300円（240円）。括弧内は団体（20人以上）料金。交通：岩手県北バス「道の駅やまだ」バス停から徒歩8分。三陸鉄道岩手船越駅から徒歩10分。Tel：0193-84-3985（代表）。Fax：0193-84-3986。E-mail：kujira-kan.staff@bz04.plala.or.jp。URL：https://yamada-kujirakan.jp。